
天使伝

HAIRU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使伝

【Nコード】

N5097C

【作者名】

HAIRU

【あらすじ】

女子高生のあみはある日異世界に迷い込む。ちよいえつちなファンタジー小説。誤字脱字は後日一斉に修正します。

第一話 白の男（前書き）

この小説には性的及び暴力的表現が含まれます。閲覧には充分注意してください。

第一話 白の男

首都東京

郊外にある進学校の教室の中茹だるような暑さにあみはやられていた。

まだ6月下旬

公立の為にクーラーの使用は制限されており、教室内は地獄と化していた。

「お前らゝ授業中だぞちよつとは起きろ」

「うゝうゝ死ぬ」

「まっTクーラーはー！！！」

「未来ある若者を殺す気があつ」

まっTと呼ばれた中年教師は
自らも大量に汗を流しながら喋っていた

「まったく元気じゃねえかお前ら。

ほら次中田読め」

「ええーなんであたしー」

机に突っ伏していた女子生徒はだるそうに顔を上げる

ピンクブラウンに染められた長髪を、くるくると指に絡めながら教師を睨み付ける

中田亜未・ナカタアミ・

は気怠そうに教科書を読んだ

読み終わるとあみは再び机に伏せた

空は快晴

生温い風が窓から吹き込む

街はいつもと変わらない時を刻んでいた

太陽が沈み辺りが闇に包まれた頃

校内にはひとつの影

「もっけータイ忘れるとか信じらんない！！！！てか暗いんだよーっ！！！！！！」

膝上20cmまで切られたスカート

第2ボタンまでぱっくり開いた指定外のピンクのシャツ
ニーハイを履いた細い足

普段通り進学校の生徒とは思えない格好で、あみは廊下を走っていた
進学校と言っても勉強以外には干渉しない学校なだけあって、生徒
はかなり自由な異装に身を包んでいる

「あつたー」

ふうと息をつき
教室から出る

「……………」

「えっ？！！！！」

かすかな声が聞こえた

「うそでしょちょっと…むりむりむりむり…!…!…!」

あみの顔からサッと血の気が引く

「資料室からだ…どうしよお」

そっと近付くと電気がついていいる事に気付きほっとする
が

「はっ…んあ…」

どう考えてもおかしい声と息遣いが聞こえてくる

「学校でやんなつての」

眉をハの字に下げてあみは呆れた

「…だれかな」

そろそろと摺り足で資料室の前まで行き

ドアの硝子張りの部分からそつと顔を出す

「っあ…はあっんっ…」

顔がよく見えない

さらに顔を出そうと曲げてた腰を伸ばす

ガシヤッ

勢いよく落ちたケータイの音に行為を楽しんでいた男はこちらを見る

「あっ…」

「はあっはあっ…ヒック…ううヒック…うゝ」

人通り少ない小道についたあみはその場にへなへなと座り込む

「うー」

教室で淫らな行為をしていた少年には見覚えがあった

茶色の長くサラサラな髪

柔らかいねこっ毛なそれはいつも軽く寝癖がついていて、そこがまた自然なボリリュームを生んでいた

切れ長な一重に薄い唇

細身ながらもがっしりした体

一瞬で誰だかわかったあみはすぐにその場をかけた

工藤祐希 - クドウユウキ -

あみの元彼

祐希とあみは中学2年から高校1年の5月、つまりつい先月まで付き合っていた

しかし中学の頃から人気があった祐希、高校入学とともに距離が広がり、あみから別れを切り出した

それ以降幾度となく女の噂は聞いていた

まだ未練のあるあみにとっては一番見たくなかった光景

「ふ…ヒック…」

落ち着いてきたあみは手の甲で顔を拭い立ち上がる

と

力が抜けるようにふらふらと体が倒れて行く

それを腕が伸びてきてぐつと止めた

「へっ??」

振り向くとあみは目を丸くして口をあけた阿呆な顔で固まる

160cmに満たないあみから頭3つ分は飛び抜けた長身

白いマントにスーツ

肩につく長い金髪が夜風になびいて光る

高くスラッとした鼻

白い肌

優しいタレ目

思わずじっと見つめてしまう

ふつと優しく笑いかけられると、顔が真っ赤に染まってしまふ

「あ、あのありが…」

「やっと見つけました」

「え？」

ふわつと体が浮いたかと思うとあみは男にお姫様抱っこされてしまふ

「ひっちょっおろしてよ……!!」

バタバタと暴れるが男にぐつと押さえ付けられてしまふ

「大人しくしててください」

そう言う男は走り出し、近くの空きビルを駆け上がる

「ちょっと……!!おーろーせーっ」

カチャ

「わあっ」

何の前触れもなく開いたドアに体は持つて行かれて前のめりになる
汚れたコンクリートに包まれた屋上は古く錆つき、柵もない

「きちゃつきちゃうっ」

怖々身を乗り出して下を見るとその高さに目眩がした

「飛び下りたら…死ぬよ、ね」

ここは6階建てビルの屋上、軽く10mは超えてるだろう
遙か下にトラックが止まっているが、この距離の衝撃を吸収するか
は不安なところだ

あははと不器用に笑いとばすが、どうしようもない

「やはり身体能力の良さはこちらにきてても健在ですね」

ぱつと振り向くと男がやれやれといった様子でこちらに近付いてくる

「く、くん なっ 変態！！！！」

「変態とはひどいですね」

「じゃあどこのコスプレまにあだよっあたしに何の用なの！！！！！！」

「コスプレ…気の強さも変わりませんね、そうゆつとこが好きですけどね」

にこつと笑って言う男にあみはまたもや顔を染める

「うつるさい！！！！だまされないからね！！！！てか変わるとか変わらないとか何なの！！！！！！」

じりじりと言いよる男を避けようとあみは後退していく

「言ったでしょう。迎えにきたんですよ…っ、落ちますよ」

「へっ…あ…！！！！！！」

踵の支えを無くしたあみの体は中に浮き急降下する

「きゃあああああ」

…「こんなところで死ぬのかな、これじゃまるで祐希のせいで自殺したみたいじゃんか…そんなの、そんなの…」

「いやっ！！！！！！！！！！」

強く叫んだその瞬間あみを取り囲む白い光り、しかしそれはあみを包み込むとそのまま消えてしまった

「今のは…まさか力を戻したのか？まさか…そんなはずないですね、さて行きますか」

男はトンと地を蹴り屋上から飛び下りるが、すぐにその姿は闇に溶けた

空には満月が光り輝いていた

第二話 迷い込んだその先（前書き）

暴力的及び性的表現が含まれます。閲覧には充分注意してください。

第二話 迷い込んだその先

深く緑の生い茂る森の中央には巨大な湖が薄暗い森に命を与えていた

「くっそあちー」

ルキは銀の髪をかき上げ再び冷たい水に身を任せる

「いい加減雨ふれつつーの…」

ぷかぷかと水に浮かびながら太陽を睨んだその時、明らかに太陽光ではない光りが空に広がる

「くっ…?!?!?!」

思わず目を閉じ再び開いた瞬間に頭上に巨大な落下物を見る

「っげ」

バシャン

恐ろしい勢いでルキに襲いかかったそれは人型をしていた

深さは2mほどであるためルキたちは底まで沈んでしまった

浮力をたよりに水面に上がったソレをルキは追いかけた

（女…？）

「はあっはあっ…つくゲホッつあー…」

ソレを脇に抱えて陸に上がり息を確かめる

「ゲホッゴホッはあ…はあ…」

「なんだこの格好、こんな民族いたか？」

短いスカート

ピンクのシャツ

ニーハイ

空から降って来たのはあみだった

「ん…」

鼻をくすぐる臭いにあみはゆっくり目を開ける

「起きたか」

「……………」

ガバッと上半身を起こし声の主を探す

「なっなんだよ」

突然の動きにルキは驚き思わず後ずさる

「あれ…さっきのやつじゃない」

「は？」

「???！つてかどこよここ!!!あたし死んだんじゃ」

「お前何言っ…」

「生きてる?!?!あたし生きてる!!!!よかったあっ…うう…
ヒック」

あみは安堵から涙を流すがルキは何がなんだかわからず困惑する

「きつとアイツがあたしを此所に捨ててったのをあんたが助けてくれたのね?ありがとっ」

につこりと満面の笑みを浮かべるあみに、よくわからないが照れくさいルキを顔を反らす

「お礼しなくちゃね、あたしあみ、よろしく」

「あ、俺はルキース、ルキで良いよ」

「変わった名前ね髪も…ハーフ？」

「は？ハーフエルフじゃねえよ、俺は人間」

「なにエルフって…」

「…てかお前誘ってんの？」

「なに言って…」

ルキの視線を追って体を見ると何も着けていない

「いつやあああああ」

甲高い声が昼前の森にこだました

足下にあった薄い布を体に巻いて頭まで被る

「最悪っ変態つくたばれヤリチン！！！！！！」

あみは顔を真っ赤にして叫んだ

「ヤリチンてなんだよ…てか変態とは失礼だな、濡れてたから乾かしてやったんだよ」

ルキはあみに寄りしゃがんで視線を同じにする

「さっき礼がどうか言ってたよな」

「え」

「けっこう良い体してんじゃん、それでもいいよ」

そう言いながらぐんぐん顔が近付いてきた

さっきの男に負けなくらい綺麗な銀髪

綺麗な二重の目は引き込まれそうなスカイブルー

筋の通った鼻

淡いピンクの唇

タンクトップから覗く鍛えられた筋肉質の体

あみは自分の状況も忘れうっとりと見つめた

しかしルキも同様に動きを止める

「…ちよつとは危機感持てよ」

「へっ？あ、そうだつやめろ変態！！！！」

両手でルキの体をぐつと押す

しかしルキはその腕を片手で押さえてあみを押し倒し、頭の上で両手を押さえ込む

「いやっ…」

ぎゅつと目をつぶるあみを目を伏せて見つめ、首にそつと口付ける

「んっ…やだっ」

布に手をかけようとして動きがとまる

「つと、残念だけど一旦終了、お客様だ」

「えっ…?」

「ほらよ服着な」

ルキは服を投げると、湖に向かって構え近くに置いてあつた刀を持ち上げた

あみは投げられた服をがっしりと掴み必死で着る

湖に波が立ちあみに見覚えのある人物が空から舞い降りる

「まったく、どこに落ちたかと探し回りましたよ、無事でよかったです」

「あんたっ!!!!!!!!!!っつかう、浮いて…」

「なんだよあみの知り合いかよ」

「えっちが…」

「あなたが彼女を助けてくれたんですね、ありがとうございます」

金髪の男は水面まで降りるとスッと水面上で歩き出す

「！！！！！」

あみとルキは目を丸くしてそれを見つめる

「あんたまさか、空の住民か？」

「おや、地上にもこのくらい出来る方はたくさんいますよ」

「いや、背中になんか隠してんだろ？」

「おっと、眼がよろしいようで」

「そ、そら？」

あみは2人の会話が理解出来ずその場に立ち尽くしたまま目をきよるきよるさせる

バサッ

羽ばたく音が聞こえた瞬間、空に純白の羽が散る

「は…ね？」

金髪の男の背から1mは軽く超える大きな翼が2本現われる

「天使サマにこんな場所で会えるとはな、まさかあみも…」

「へ…あ、あたしは人間よっ」

「いえ、あなたは私達種族の血を体に流していますよ」

男は優しくあみに笑いかける

すでに男は2人との距離をぐんと縮めていた

「なにいつてんの…」

「ですが、まだ目覚めていないようですね、時がくるまでは…」

男はそこまで言うとうっくり振り返る
そこにはしっかりと武装をしたがたいの良い兵士が数人こちらを睨んでいた

「貴方方は…また邪魔をするのですね、ルキースさん後は頼みましたよ」

それだけ言うと男は翼を広げ空高く舞い上がって行った

「なんで俺の名前…」

ルキは手で目をかばいながら空を見上げたが、すぐに兵士の動きに気付き剣を構える

「あみ」

「ふえ？」

急に声をかけられあみは素頓狂な声を出す

「危ないから俺から離れんなよ」

「う、うん」

なにが始まるのかとあみは不安になるが、とりあえずルキの後ろにすつと隠れる

兵士は勢いよく2人の方へ走り出す

1人が手に持った巨大な棍棒をルキに振り下ろす

「つく」

ルキは剣でそれを受け止めると力強く押し返す
兵士はバランスを崩すとルキが足に切りかかる

「ぎゃ ああああ」

足下から血が噴き出すと兵士はその場に転がる

息つく間もなく更に3人が剣を手に切りかかる

ルキは瞬時に空いてる手で剣を抜き1本で前の2人を押さえ込み

横から来た男の腹部にもう1本を深々と差し込み、ぐつと横に裂く

「ぐはっ…ゲホッ…」

腹が無惨に引き裂かれた兵士は前屈みになり倒れ、そのまま体をピクピクと痙攣させ事切れた

一瞬の出来ごとに前の2人が啞然としてそれを見ていたがすぐにルキに切りかかる

再びルキが切り付けようと腕に力を込めた瞬間

「いやっ放せ!!!!!!!!!!やだやだやだ!!!!!!!!!!」

あみは潜んでいた巨体の兵士に抱えあげられる

バタバタ抵抗するも片手で抱えられたあみは何の力も持たない

ルキがあみに気を取られた瞬間を兵士は見逃さずに剣を突き刺す

「痛っ」

すぐに1人を受け止めるも、もう1人の剣が右肩をかすめる

「ルキ!!!!!!!!!!」

肩の痛みに顔を歪ませながら2人を薙払いあみへ向き直る

「動くな」

兵士の声がルキを止める

兵士の腕に力がこもりあみの首がきつく絞まる

「うつ…」

「おい！！！！」

「ぐっゲホッゲホッ、おおおおお」

兵士は急に苦しみだした

「大事な体を傷付けないようにと言ったでしょう」

ルキは開放されたあみに駆け寄り声の主を探す

「ゲホッ…はあはあっはあ…」

「大丈夫か」

「ん…」

「すみませんねえ部活がご無礼を」

しゃがれた声の主は不気味な老人だった

オールバックにした肩下までの髪は紫に染められ
骨張った顔には深いしわが刻まれていた

老人はいつ来たのか兵士の横に立ち小柄な体は腰が曲がってるせいでさらに縮んでいる

「つぐ…ゲホッ…ミールさ、まゴホッ」

「ふん、お前のような下級兵士を使わせた私が馬鹿でしたね」

ミールは冷やややかな眼で兵士を見下ろすと指をパチンとならした

「お助…ぎゃあああ」

音を合図に炎に包まれた兵士はあつと言う間に炭と化した

「…ひどい」

「ひどくなんかありませんよ、あなたを傷付けたのですから当然です」

「でも仲間じゃないの…最低だよ…!!」

「おや、人聞きが悪いですね」

じりじりと老人は2人に寄る

ルキは剣を構えてあみの前に立つ

「あなたに用はないのですよ、邪魔しないでください」

ミールが片手を軽く振るとルキは風に飛される

「???!!」

ドサッ

ルキは衝撃に一瞬倒れる

「さあ、行きますよ」

「いやっ」

あみは手を掴まれ引張られる

「くそっ」

ルキは再びミールに剣を振りかざすと微かにミールの服をかすつた
すると見る見るうちにミールの顔色が変わる

「私に振れるな小僧！！！！！！」

ミールは狂ったように叫ぶと勢いよくルキに手を振りかざす

火花が散りルキの全身に電流が走る

「つく、つ…」

激しい衝撃にルキは倒れる

「いや…」

あみは惨い傷を負ったルキに眼を覆う

「はぁ…はぁ…」

「おや、しぶといですね」

『ミール何をしている』

空高くこだました声にミールは今度は恐怖に顔を染める

『何をしているんだ』

「わ、わたしはこの娘を掴まえようと…」

『まだ力を戻していない天使を連れ帰ってどうするつもりだ』

「それは…ですね」

『血を抜いて金にでも変える気だろう』

「ひっそんなことは…」

『まあ良い戻ってこい』

声はそこでおさまると老人も闇に姿を消した

「なんなのよ…」

呆氣に取られたあみはその場に崩れる

「あ…！ルキ…！！」

急いでルキに駆け寄るが全身を火傷したルキは身動きも取らない

「ちょっと…起きなよ、ねえ…ねえ…!!!!」

あみの目から涙が溢れ頬を伝う
それが一滴ルキに落ちる

その瞬間ルキは眩い光に包み込まれた

第三話 意味することとは

心地よい夜風が髪をさらさらと流れる。

ルキは胸の上に軽い重みを感じて目を開ける、ルキの上に頭を乗せ顔をこちらに向けたあみの顔を見つける。

「傷が、ない？」

全身に大火傷を負って瀕死だったはずが傷は綺麗に消え痛みもない。肩には小さな傷跡しかない。

「これは…」

余程泣いたのであろう赤く腫れたあみの臉を見てルキは呟く。

「だるいな」

体に鈍い痛みの残るルキは再び眠りについた。

どのくらい寝ていたのかあみは多少の怠さを感じながらむくつと起き上がる。

「ん…学校行かなきゃ」

しかし周りの光景を見て再びがつくりと肩を落とす。

「夢じゃ、ないわけだ」

はあと息をつき異変に気付く。

「ルキ…？」

「ルキ？！ルキ！！！！」

ふらふらとした足どりで探そうとするが力が入らずに倒れる。

「いだい…」

顔を打って鼻をぶつけ思わず涙目になるが、むくつと顔を起こすと、

目の前に顔がドアップで映る。

「わーっ!!!!!!!!!!!!!!」

「ーっ耳いてえ」

眉間にしわをよせ不機嫌そうにあみを抱き起こす。

「生きてた…」

「勝手に殺すな」

「だ、けど怪我が……!!!!!!」

心配そうに体を見回すあみに、火傷のことを思い出す。

「ああ、治った」

「治ったって、あんなひどい怪我だったじゃん」

「あーその事だけどさ」

ルキは火を焚いていたようで枝をポキンと折って火にくべた

「あみさっき泣いた？」

「へ？あ、泣くわけないじゃん！！！！自惚れないでよばっか」

からかわれたと思ったあみは興奮したように息を荒げて否定する。

「目、腫れてる」

「え、う…それは…」

完全に顔に出して焦るあみにルキはプツと吹き出す。

「わかりやすいのな、あみ」

「うるさいっ」

ククツと笑うルキにあみは恥ずかしくなり、手元の小石を投げた。

「あーでさ、お前昨日金髪野郎が言ってたこと覚えてるか？」

「え？うん」

あみは何だったかなと髪をいじりながら思い出す。

「見た限りお前は人間だ」

「あたり前でしょ！！！！健全な女子高生よ！！！！」

「じよしこー？…まあその言葉とか、服見る限りあみはこの世界の人間じゃない」

「へ？何言って…」

あははと軽く笑うあみにルキはさらに続ける。

「金髪野郎の話も合わせると、お前は何かの理由があってこっちに来たんだ、あんだだけ狙われてんだから余程のな」

「う、うん」

あみは信じられないという顔で話を聞く。

「で、ここからは俺の推測、お前は天使だ」

ずばっと言ってのけたルキの顔はいたって真剣。

「あたしは…人間だもん」

「天使は、昔俺らと共存していた。遥か昔地上は天界と繋がっていたんだ、けど…」

「？」

「俺たち人間の先祖は、天使を次々と殺していったんだ」

第四話 古代神話

今から逆上ること数十億年、神はひとつの空間に惑星を並べ、命を吹き込んだ。

星には「水」「地」「火」「緑」が与えられ命が育った、次第にひとつの種族が知能を持ち、文明を築き上げた。

しかし時代の流れとともに星からは当初の美しい姿が消えていった。

神は嘆いた。そしてこの世界の隣りに新たな空間を作り出した。

そこには5つの種族と8人の妖精を造り出した。

人間

エルフ

ドワーフ

コロボツクル

天使

それぞれの種族は見た目は違えども共存の道を長く歩み、天地は自由に行き来ができた。

そして

光

影

火

水

土 風 緑 雷

をそれぞれ司る妖精達は彼らを優しく見守り続けた。

種族はそれぞれに長けた能力を持っていた

人間は高い知能と集団での行動力を持ち、様々な発明を生み出した

エルフは美しい容姿と妖精との共生により自然の力を授かった

ドワーフは小さな体とは反対に巨大なパワーを持った

コロボツクルはドワーフよりもはるかに小さな体と人間以上の知能を手にいれた

そして天使は大空を舞う翼と神の力を分け与えられた体を手に入れた

天使の翼は七色に輝きその抜けた羽から作られる布は希少価値が付けられた

涙は協力的な再生力を持ち

血は外気に触れると美しく輝く結晶と化し、高価な宝石として出回った

そして、その生き血はあまりの再生力故不老不死薬であるとさえ言われた

人は次第にその知能を駆使し、巨大な文明を築き上げた

しかし、彼らは知能の発達と共に、欲を膨らませていった

天使の力欲しさ

そして、永遠の命欲しさに人は天使を殺した

多くの血が流れた

神は人の過ちに呆れた

そして天使と人は天地に分けられてしまった

天使は激滅し、絶滅さえ恐れられたが、天界に残ったエルフ達とともに再び国を立ち上げた

それから数千年天地が交わることはなく世界は廻り続けた

しかし天使が多く死んだことで、神は力を失い、世界はバランスをくずし始めていた

神の衰弱により魔物も増え、危険を察した神は1人の天使に力を託し、自身は身を隠したという

「世界が破滅を迎える時、私は再び戻るだろう」

との言葉を残して

第五話 旅立ち

朝露が葉を伝い結晶を落とし、湖には朝を迎えた動物達が潤いを求めて訪れていた。

一晩中話していたあみとルキはぐったりと湖のわきに寝ていた。

「ん、頭いたい…水浴びしようかな」

あみはだるい体をゆらりと不気味に起き上がらせると、ルキの顔を覗き込んだ。

「……………」

静かに寝息をたてながら、座って木によりかかる様にして寝るルキは、光を浴びて美しい。

「祐希…」

そういえばあつちで最後に会ったのは祐希だったな、等と考えながら物影に移動し服を脱ぐ。

「別に、帰れなくても良いかな…うん」

頭まで水に潜り全身を濡らすと、首に痣があるのに気付く。

「やだこれ」

首をきつく絞められた痕が赤く線を作っていた。

ガサッ

「誰?!?!」

体を水につけて振り返る

「なんだよ、あみか」

「あ、ルキ」

「おはよ」

「ん、おはよう…ってちょっと——！！！！！！」

「っるせー」

ルキは水浴びをしようと服を脱ぐ

「ひいいい——くんなっ」

あみはばしゃばしゃと沖に逃げる、しかし湖は透明度が高くほとんど見えてしまう。

「おい」

「わっ！！！！！！」

深みに足を取られてあみは水に沈む。
体を長い腕が後ろから包み浅瀬に引かれる。

「コホッ、う…うー死ぬかと思った」

ふと背中の中にも温もりに気付いて振り向く。

「ルキありがと…」

「こちらこそ」

「へ、何言って」

よく見るとルキも全裸で、水中で裸で後ろから抱きつかれている。

「き…」

例のごとく叫ぼうとしたあみの口を長い指が塞ぐ。

「んっ…ねえル、キ…っふ」

あみは水中で暴れるがしっかりと抱き直されてしまう。

「首、痣になってる」

髪をかき分けると、痣にそつと触れ、なぞる様に口を這わせる。

「ひゃ…やめて、よ！…！！」

肘を全力で腹にめり込ませると、緩んでいた腹部は思い切りへこむ。

「ーゲホッおい！！！！」

水を掻いてあみは陸につくと、見られまいと草影に入って服を着る。

「盛ってんなばあーか！！！！」

「ったく、かわいくねー」

べーと舌を出して逃げるあみにちえつと舌打ちする。

「ルキはさ、旅してんの？」

ルキにパンをもらい、もぐもぐと口を動かしながらあみは話す。

「んーまあな」

「なんで？」

「探し物」

「なに？」

「内緒」

「えー」

「内緒」

「けちー」

あみはぶうと口を尖らせる。

「あたしどうしようかなあ」

濡れた髪を指に絡めながらあみは話した。

ルキは荷物―と言っても、2本の剣と腰につける小さなポーチ―を
まとめると、火を片付け始めた。

「家に帰りたいとは思わないけどさあ」

「またあいつら来たら嫌だし、んー…」

ルキに向き直ると、火を消し終わった様だった。

「ちょっとー聞いてんの？」

「ん」

適当に返すと、スタスタとルキは歩き出す。
あみは呆然とそれを見ている。

「なにしてんだよ、行くぞ」

「へ？」

思わぬ一言にあみは驚く。

「ほら」

「だけど、あたしといったら危ないし…怪我したばっかだし…」

「別に、どーせ目付けられたっしょ」

「あ、ありがと。ほんとになんか、うん、ありがと」

あみなりの精一杯の言葉を言っ たつもりだが、通じただろうか。

「じゃあ、礼してよ」

「もちろん！！！！」

あみはかばつてくれたルキに感謝の気持ちを示したかった。

「えっと、なにがいいかな…ねえ、なにが」

顔を上げると、そこにはルキの端整な顔があった。

ルキはあみの後頭部に腕を回すと、ぐっと引き寄せて口付ける。

「ん…」

あみは急なことに目をぎゅっとつぶる。

唇を割って、舌が入り込むと温かさが口内に広がる。

「ちよっ…んあ…っは…」

ちゅっと音を立てて軽く唇をついばむようにして顔が離れる。

あみは顔を真っ赤に染める。

「っにすんのよばっ」

ぺろっと舌を軽く出してルキはスタスタと歩き出す。

「置いてくぞー」

「ま、まちなさいよっ」

静かな朝の森に騒がしい声が響き渡る。

空からは監視の目が光っていた。

第6話 水の街ウォーリッシュ・異変・（前書き）

性的表現が含まれます、ご注意ください。

第6話 水の街ウォーリッシュ・異変・

「わあーきれい」

街は活気に溢れていた。

露天には様々な店が連なり、野菜や特産の布、雑貨を並べている。街にはどこを見ても色とりどりのタイルで整備された小川が流れており、澄んだ水がそこを流れ涼しげな風が街を吹き渡っている。

街の中心部には巨大な噴水―鮮やかな装飾が施され、直径5mもの円形の本体からはガラスのパイプが何本も伸びそこから空高く水が噴出され光にあたってはきらきらと輝いている―が設置されていた。

「すごいねーなんか水のテーマパークって感じ」

汚染された水ばかり流れる都会育ちのあみにはウォーリッシュの美しい町並みは珍しく、目を見張らせてそれらを眺めた。

「ここの近くの高山の雪解け水が地下から湧いてるから水がこんな綺麗なんだとよ」

「へえー雪解け水かあ」

「先に宿とるぞ」

「う、うん」

すっかり町並みに見とれていたあみはさっさと歩き出してしまったルキを走って追いかけた。

宿は2人分の宿泊費を考えて質素なものを選んだが、店主はきさくであみはすぐにうちとけた。

「お嬢ちゃん変わった服だね、どっかの民族衣装かい？」

「あ、うーんとね趣味…かな」

「ほおなかなか私は好きだが2人は旅をしているんだろ？ここから先は山脈だ、熱さにも寒さにも耐えられる服にしとくのがいいと思うよ」

「そっか、考えとくよ」

「うんうん」

「ありがとねおじさん」

横で荷物を渡していたルキもそれを聞いて、それもそうだなと頷いた。

2人は一旦宿を出て、服屋にはいった。

ルキは先日傷だらけになった服の変わりに適当なカーキのタンクトップに黒いズボン、茶色の暖かそうな上着を買った。

「これなんかどうですか？」

「あー！！かわいい！！！！どうしよ、迷っちゃう」

動きやすいズボンにしようか、短いワンピースの下にズボンを穿こうか、それともつと自分らしい派手なものにしようか、あみはすっかり迷ってしまった。

「遅いんだけど」

「う、ごめん…」

そう言つてルキを振り向くと、もともと背の高いルキは細身のシルエットの服に身を包まれ、意識しないようにしていた綺麗な顔に銀髪がぱつと目を引き、明らかに女性店員もルキに目を奪われていた。かっこいい…あみも思わず見とれてしまいそうになるが、ぱつと目を反らす。

「これにしろよ」

「え、ちよつと選ばせてよー！！！」

さつさと会計を済ませるルキは店員に着せてやってと促すと、あみははずると試着室に連れて行かれ服を変えられた。

「自分でできるつてば、ねえ、それはだめー！！！！きゃあああああ
あああ」

「よくお似合いですよ」

「お、出来たか。良いじゃん。」

あみは白い麻に鮮やかな糸で刺繍の施されたワンピースに茶色いブーツを穿かされておらずと出てきた。
もともとギャルの入ったあみはこんな清楚な感じの服は着たことがなかった。

「こおゆつの、似合わないもん」

あみは俯いて口を尖らせる。

それを見てあははと軽く笑ったルキは、あみの耳元に口を近づけてそつとつぶやく。

「すげえ可愛いから、襲っちゃいたい」

あみは目を丸くして顔を染める。

耳まで真っ赤にそまったあみは、既に店を出ようとしてるルキを追いかける。

「変態」

ルキにそう言うときあみはまた俯いて、赤くなった顔を隠す。ルキはそれを見るとクスクス笑って歩き続けた。しかしすぐに何かを察して足を止める。

「ルキ？」

「なんだ、街の奴等がやけに騒いでる」

先ほどのまでの平和な空気が一変し、街は緊張した空気につつまれる。すると、街のいたる所から叫び声が聞こえる。

「水が……!!」

誰かがそう呟くと、一斉に小川へと視線が向けられた。

見ると澄んでいた水は不気味に黒く濁り、どうやら叫び声はこの水を飲んだ人のものだった。

人々は街の中心にある噴水広場に集まり、町長を待った。
噴水からは黒く濁り異臭を放つ水が溢れていた。

「おい、マルセウさん。どうなってるんだ!!!」

中年の町人が声をあげると、人々の視線は一人の男に向けられた。
マルセウと呼ばれた男は人の波を掻き分けながら、広場の中心へと
進み一息つくとゆっくりと口を開いた

「水神様が、暴れて居られる…」

その言葉に人々は驚き、慌てふためいた。
あみとルキは訳が分からなかったが、これがかなりの異常事態であることはわかった。

「そこで、若い者から有志を募りたいのだが」

「まさかまた…」

「ああ、水神様が望んでおるのだ仕方ない。頼む。」

「だからっておかしくないかい?! なんて最近になってこんな…」

あみは意味深い会話に疑問を持ち、近くの女に尋ねた。

「あの、どーゆうこと?」

「数ヶ月前から、よくこんなことがあるんだが、毎回水神様に若い娘を捧げているんだ。ちょうどあんたぐらいの年の子を要求するもんでね」

「水神ってただのロリコ…! だっ!」

あみの頭にルキの拳が降る。ルキはばあかと呟くと、別の男に話し掛ける。

「水神様って妖精の1人だろ?」

「ああ。そうだよ。」

それを聞いたルキは考え込んでしまった。

その間にも周りでは生け贄を誰にするかで話し合いが続けられた。数人の名前があがっていたが、そのたびにその親であるう人が泣き崩れていった。

「なあ。あみ。」

「なに?」

「生け贄になつてくんない」

「はあ?!死ねってことかこのやるー」

「わー待てよ。死なせねえから!!」

「どゆことよー」

「まあ後で言うよ。」

「……」

「あみ？」

「……らね」

「ん？」

「信じるからね！」

ぱつと顔を上げたあみは目に涙をたくさん貯めて、ルキを睨んだ。強気な態度とは裏腹に震えるあみが可愛くて、ルキは思わず笑う。

「なによー!!!」

あみは馬鹿にされた気がしてバシバシとルキに殴りかかった。

「わりいって、大丈夫だから。守ってやるよ。」

にこつと笑いながらそんなこと言われたら断れなくて、あみは勢いよく手をあげて声を発した。

「あたし生け贄やりますっ!!」

何て軽い言い方なんだろうかと後から気付いて赤くなる。

ルキは口元に手を置きながら俯いて、必死で笑いをこらえていた。

「…」

反応がないのでゆっくり周りを見渡したあみはぎょっとした。

「あのうー…」

「ありがとうございます!!」

「ほんとうに良いのかい」

「まだ若いのにねえ…」

熱い眼差しを受けたあみはルキの後ろに隠れる。

するとルキはあみをそつと横に並べて肩に手を置いた。

あみは更に顔が熱くなり、心臓が潰れるかとゆっくらくいきゅうつとなったのがわかった。

「但し、条件がある。」

あみと町人は「え」とルキを見た。

「ここじゃなんだし、町長さんとゆっくり話したいんだよね」

「でわ、我が家で話しましょうか…」

マルセウは手を揉みながらわざとらしく笑ってみせた。

マルセウに案内されてたどり着いたのは、街の奥に建つ立派な屋敷だった。

入り口は見上げると吹き抜けになっていて、天井には美しい絵が描かれていた。

長い廊下は丁寧に掃除され、所々に骨董品が飾ってあった。
ルキはマルセウの後をすたすたと歩いていたが、あみは不気味な剥製を警戒しながら歩いていた。

「早くこいよ」

「ひiiiiiiii熊があー」

「おい……」

「目えきもいつやだっ」

「……」

あみは壁に掛けられた地獄絵図を気味悪そうに横目で見た。

「趣味わる……」

「わっ！……！！」

「きゃあああああああ」

長い廊下にあみの声はエコーがかかり、キーンと響く。

「あつはは、ばつかじゃねーの。っあー…腹いてー。」

涙目になりながら驚くあみにルキはゲラゲラ笑う。

掴み所のない人だなあとあみは怒りながらも考える。

「ふんっ」

あみはそっぽを剥いて口を尖らせた。

ルキはクスクス笑いながらあみに向き直る。

「あみー」

「…」

「あみちゃん？」

「…」

「…」

「…きゃー!!」

ルキはさりげなくあみを壁側に追い詰めていた。

壁にあみを押しつけると、両手で逃げ場を塞いであみの顔を覗いた。

「ち、近い…」

「あみ怒んなよー」

眉を下げて顔を覗き込むルキはなんだか色っぽくて、あみは鼓動が速くなるのがわかった。

「近いってば…」

あみは赤くなつた顔を見せまいと更に俯いた。

「あみー」

「べつにおこつてな…あつ…ねえ、なにすんの…んっ」

首筋に温かい舌が這い、息があがる。

ルキは肩肘を壁につくと、先に歩くマルセウ達から逃れるように置物の影に隠れる体制になった。

「…いやっ…ん…ル、キ…見られちゃうってば………」

「あみが話してくれないからだよ」

「だから…って…んあ…すぐこーゆ……あっ」

首にそつて何度も舐めると、だんだん舌が首から下がってくる。

肩紐を軽くずらして下着も下げようとすると、あみはルキの手を押さえる。

しかしルキは軽くそれをあしらうと、膨らみがあらわになる。

「やだ…」

あみは顔を真っ赤にすると、目を潤ませた。

ルキはあみに優しく笑いかけると、目を伏せ膨らみを口に含む。

そつと優しく、しかしあみがあまい吐息を漏らすと、強く何度も吸い紅い実を舌で撫でるように刺激する。

「あ……ん、んーっ」

声をあげないように口を手で押さえていたあみは力が入らず倒れそうになる。

「つと…あぶねー」

片手であみを支えたルキはあみの服をそつと直して立たせてやる。

「…ばか」

あみは顔を赤くしてルキを睨んだ。

「いじめちゃったから、詫びてやったんだよ」

「どこがよー!」

更に怒るあみの口にそつと口付ける。

「やらしい声出しちゃって。気持ち良かったんだろ？」

ルキはそう呟いてにこつと笑うと、先に歩いていたマルセウが呼んでるのに気付いて歩きだしてしまった。あみは熱くなった体をなん

とかしようにと大きく息を吸って後を追った。

火照った顔は中々熱が抜けなくて、あみは手でパタパタと顔を扇いだ。

案内されたのは大きな客間だった。

メイドに促されて席に着くと、マルセウは早速話を始めた。

街は何度が生け贄を拒んだが、汚れた水は伝染病をもたらし、多くの犠牲者が出たと言う。

街の工業資源である水とは縁が切れないから移転も出来ず。まさか神の子である水神に手を出すことも出来ず、今に至るのだ。

「手は尽くしたが、どうにもならずってわけか…」

「はー…大変なんだねえ」

あみはテーブルに出されたお茶を飲みながらおばさんくさく相づちをした。

きっと街の水を使ってあるのだろう、口当たりがよくまるやかな水が喉を潤す。

「ええ、もう困り果てておりまして…それで、条件と申しますのは…？」

第7話 水の街ウォーリッシュ・世界の影・（前書き）

暴力的表現が含まれます。閲覧にご注意ください。

第7話 水の街ウォーリッシュ・世界の影

水神は街の下に流れる地下水脈が湧き出ている泉にまつられているのだという。

その地下水脈は自然に出来たもので、明かりもなく、あみとルキは小さなライトを頼りに進んだ。

「つたく、なんでこんなことに」

「うう、ごめん…重い？」

「すげえ重い……ってーな!!」

ルキに背負われているみは、後ろからルキの後頭部を殴った。効果抜群。

「んな格好して誘いやがって、犯すぞあほ！」

「うるさい変態！」

あみは清められた純白の布一枚で包まれ、細い紐で難とかそれを止めてある。

靴は脱がされ、下着まで取られた身動きの取れない格好は、生け贄が逃げないようにと考慮されたものだろう。

そんなわけでルキに背負われているあみだが、不安の色が隠せない。

「ねえ、ほんとに大丈夫なの？」

「あ？任せとけて。やつら妖精は神の子だ。そいつらは人間の為

に神が作ったのに、生け贄を要求したり意味なく暴れるわけがねーんだよ」

「だけど、すごい力持つてるってマルセウさんが…」

「だからそれを俺らを殺す為に使うわけねえんだよ。他の奴が関わってるに決まってる」

『水神を静める方法を知っている。必ず無事に終わらせるから、俺にあみを生け贄として連れてかせてくれ』

それを聞いたマルセウはその気迫に負け、2人を行かせた。

ルキもルキだが、こんなアバウトな説明に、ふたつ返事で答えるような町長で大丈夫なのかとあみは顔を歪ませてそれを眺めていた。

「つーかさ、何か背中に刺さってるんだけど？」

「えっ」

「ネックレス外されたんじゃないかったの？」

あみは出てくる前にこっそり取り返していたのだ。それがルキの背中にめり込んでいた。

「わっごめん！」

「男にもらったのか？」

「…大切な人から昔貰ったの。今は可愛いから付けてるだけ…」

「へえ」

それはまだあみが受験に追われていた去年のクリスマスに、祐希から貰ったものだった。

その時の『高校行っても、よろしくな』の一言が嬉しくて、祐希と同じ進学校に必死に勉強して入ることが出来た。

今でも捨てることの出来ない、大切なもの。

無言のルキにそんな気持ちを見透かされてしまうのが怖くて、あみはルキの肩にぎゅっとしがみ付いた。

「明るくなってるな」

「なんか聞こえない？」

「…声だな」

急に広いドーム状の洞窟に出ると、そこからは何本もの地下道が広がり、そこに流れて行く水は巨大な泉からつながっていた。

泉の中心からはゴボゴボと大量の水が湧き、その後ろに小さな浮き島があり、そこには水神らしきものをかたどった像が薄汚れて立っていた。

「湧いてる水は綺麗だな…」

ルキはあみを降ろしながら周囲を眺めた。
清らかな水は泉に広がるとみるみる濁っていく。

『…やっときたか』

洞窟に響く声に2人は警戒して顔をあげる。
しかし、その姿は見えない。

『付き添いは帰って良い。生け贄はこちらにこい』

「はいはい」

ルキは踵を返すと言われた通りに戻ってしまった。

「ちょ、ルキっ」

あみは追い掛けようとするが、岩でごつごつした洞窟に走ることが出来ない。

「うう…」

あみはその場に立ち尽くしてルキを見る。
するとルキがそつと振り返ってウィンクしてみせる。
しかし、すぐに姿は闇に溶けて見えなくなる。

「なんてやつ…うう」

『お前、名前は何という』

「はあ、あみです」

『あみ、こちらに来なさい』

「う…はい」

あみはそつと水に足を浸けて浮き島に向かう。

黒い水は足に微かな痺れをもたらし、鼻を突く匂いに顔が歪む。
大分進んだところで、目の前に光りが現れた。

その中心から現れたのは美しい顔をした半魚人だった。

長い髪は青く光り、その間から覗く長く尖った耳と長身の体からし
たたる水は艶やかさを出している。

あみを見つめる深い瑠璃色をした切れ長で鋭い瞳は、どこかくすん
で見えた。

（口、ロリコン水神かつこいい…！！）

『く…るな…』

「へ？」

『にげ…うう…つく…』

水神は自身を抱き締めるようにつずくまり、うめき声をあげた。

「ちよつと！大丈夫?!」

『う…ぐおおおおお』

「ひゃっ」

水神は獣のような雄叫びをあげると、その姿は幻のように消え、そ
こから黒い光りを帯びた魔物のように姿を変えたそれが現れる。

『やっと来たか…』

耳は不気味な角となり、髪は輝きを失った。

細かった体はがたいのよい大男へと変わり、爪は鋭く尖った。

足は鱗をもつ尾びれと形を変え、手を振り上げると水が量を増す。

「いやっ」

足を取られたあみに向かい魚人は勢いよく泳ぎだす。

『血を、血をよこせ!!』

あみの肩を掴んだ魚人は布を引きちぎり、肩に牙を向ける。

「やだ…ルキーー!!」

ヒュツと風を切る音が聞こえると、魚人の肩から鮮やかな青い血が吹き出し、えぐれた肉をさらに剣が深々と刺し、骨まで傷つける。

『ぐっ…なんだ貴様!!』

傷ついた肩を押さえながら、傷を与えた人物に向き直る。
解放されたあみは急いで物陰に隠れる。

「てめえこそなんだよ!!本物の水神さんはどこやった」

『俺が水神だ、もっとも中身は違うがな』

「体に乗っ取ったのか…?いや、魔物に妖精が負けるわけ…!!」

魚人は水中にルキを引きずり込む、ルキは切り掛かろうとするが、

水のなかでは身動きがとれない。
なんとか脇に潜り込み微かに剣を刺す。

「ーはっゲホッゲホッ…はあっ」

「ルキ！！」

あみはルキに近づこうと動く。

「くんな！！」

あみはビクツと体を強ばらせると、そこに立ち尽くしてしまう。
ルキはあみをちらつと見ると、すぐに視線を水中の魚人に戻す。
既に魚人はルキに向かっていたが、ルキはそれをかわすと魚人を踏み台に飛び上がる。

『ぐっ』

魚人は水中から姿を出すとルキに手を伸ばす。

しかし水から出て勢いを失った魚人に、ルキが上から自身の体重を使って剣を突き刺すと、再び肉をえぐる。

そのまま魚人に体重をかけて下に勢いよく落とす。

『ぐあああっ』

水に打ち付けられた魚人はうめき声をあげながら、ルキの足を掴んで再び水に引きずり込むと、上にまたがり動きを防ぐ。

（くっ息が…）

ルキは遠退く意識のなかで、自分からどきあみのもとへと向かう魚人を見ていた。

「ゲホッゲホッゴホッ……ち……くしょ」

なんとか四つんばいになり立とうとするが、脚には先程捕まれた時に刺さった鋭い爪痕が残り、傷からはだらだらと血が流れた。

「やだ…ルキ!!……きゃあ?!!!」

壁に押しつけられて背中に鈍い痛みが走る。

「うっ…」

肩に爪が突き刺さり血が滲む。

「…や、だ……きゃああああ!!」

肩に牙が深々と刺さる。

皮膚を突き破り、血が溢れる。

「いや…ル…キ」

魚人の背後にゆらりと立つ人影。

気配に気付き魚人が振りかえる前に、その背中に激痛が走る。

『ぐ…はっ…貴様あ』

もう一本の剣でとどめを刺そうと構えると、魚人がそれを止める。

『この身体は…っぐ……水神のものだ…ぞ』

「だっ…からなんだ、精神は…どこかに閉じ込めたんだろ……ゲホッ」

『お前が…刺せばこ……の身体ごと吹き飛んで…やる』

ルキが一瞬構えた手の力を抜いた瞬間、その身体は鋭い爪に裂かれ、血飛沫をあげる。

「くっ……」

そのまま後ろに力なく倒れると、水は赤黒く染まる。

「いや…ルキ…いやああああ!!」

あみの瞳から流れた涙はキラキラと光りながら水面を打つ。その瞬間、まばゆい光がその場を包み、魚人を飲み込む。

『な…んだ……?!ぐっ…うおおおおおおお』

魚人の身体から光が溢れたかと思うと、邪悪な姿から水神の姿へと戻り始める。

『やめろ……や…め』

一層強い光に包み込まれた魚人は精神を身体からはがされ消滅する、水神の身体のみがその場に浮かんで残った。

「っはぁ…はぁ…何今の……」

あみはその場に座り込み、這うようにルキのもとへ行った。

「ルキ…？ルキ………ルキ！…！」

ぴくつと身体が動き、ゆっくりと上体が起こされる。

「ルキ…？」

大量に溢れていた血はわずかになり、ルキはゆっくりとあみを見る。

「あみ…」

ルキはあみの腕を引いてきつく抱き締める。

「えっルキ？！傷は…？」

「………」

「ねえ…ルキ…？……あつ…」

あみの肩に深く刻まれた傷にそつと口付ける。

「ごめん」

「え…？」

「まじ、すげーあぶなかった…ごめん」

腕に力を込めたルキはそつとあみを抱き抱えて、水神の像のもとへ

行く。

「ルキ、傷が…」

「大丈夫」

「でも…」

『…を……せ』

「!」

温かい声が響く。

どうやら銅像の下からのようだ。

「なんだ？聞こえねえ」

『ぞ…こわ…せ』

「こわせ？」

「この像じゃない？」

「像を…？」

ルキはあみをそつと座らせると、2本の剣のうちの1本を抜き像に向ける。大きく振りかぶり、力を込めて像に切り掛かる。

「?!」

何か強い力に跳ね返される。像には傷ひとつつかない。

「なんだ？」

『て……しさま…のちか…ら』

「…あみ、たてるか？」

「え？あ、うんへーき」

ルキはふらつくあみを支えて立たせると、前に置き後ろから抱くように支える。

こんなときでもあみは緊張して、身体が反応してしまう。

「これ、持ってゆつくり振り下ろすんだ。いいな？」

「う、うん」

あみは両手でルキの剣を持ち、その上からルキが握ってゆつくりと振りかぶる。

キンと剣がなると、びくともしなかった像がガラスの様に碎け散る。破片は黒い煙をあげながら溶けるように消えていく。

その下からは、碧く輝く球体が現れる。

手のひらサイズのそれは持ち上げると、さらさらと砂のように崩れ、中から現われた美しい光は碧い線を引きながら身体へと入り込んだ。

「あ…」

それを見ていたあみは再び力が抜け、ルキに体重をかけるようにな

る。

ルキはそれを優しく受け止める。

そこへ身体を取り戻した水神が近寄り、あみの前に膝をつく。

「へ？」

あみの手を取ると、そっと口付けする。

「え、ちょ……」

思わず顔を熱くするあみにルキはむっとしてあみを抱き寄せる。

『こんな怪我をされて……ですが、やっと時が来たのですね』

ずっと立ち上がる水神はあみの怪我に触れながら、詳細を説明し始めた。

半年ほど前に、水脈を伝って魔物が泉に来た。

もちろん倒すことは容易いが、水を汚したくなかった水神は魔物を地上に追い返した。

しかし、魔物は地上で天界の魔物と出会い、唯一妖精の力を抑えることの出来る天界の悪魔の果実を手にいれ戻ってきた。

元々人々の水の汚染や、不安定になってきた世界によって力を失っていた水神は、水晶に精神を封じ込まれてしまった。

そしてその身体を使って魔物は人を喰っていたのだ。

「いくら弱ってたって、そんな魔物なんか……それに、悪魔の果実なんて聞いたことねえよ」

『それは私もひっかかっているのだ、あのような力を持つ魔物がい

るはずはない。果实について、お前が知らなくて当然だ。天界との行き来は上流の天使以外出来ぬはずだし、果实は嚴重に見張られている』

あみとの態度の差に呆れながらも、ルキは水神の身体に傷がないことにほっとする。

『水を戻さねばな』

そう言っていると水神はそつと泉に脚を浸ける。同時に水は透明に透き通り、美しく輝く。

『私は力を蓄えんとする。迷惑をかけた。水脈の出口まで送ろう。』

そう言っていると、あみとルキは水に包まれて流される。水は柔らかく、とても心地よかった。

変わり果てた2人の姿にマルセウ達は驚いたが、事情を聞くと、大喜びして宴を開き、街中で2人を祝福した。

宴は夜が更けても続けられたが、2人は宿に戻り休むことにした。マルセウは是非うちにと招待してくれたが、あみは不気味な廊下を思い出して断った。

「つかれた……」

「うー…だるい…おふろ入って寝るね…じゃ」

それだけ言っであみは荷物を抱えながらルキの部屋を出ようとする。

「あれ、風呂一緒に入んねーの？」

「はいんないしっ！」

バンとドアを閉めると、ドスドスと音を立てて部屋に行ってしまった。

残されたルキはぼふつとベッドに寝転んだ。

隣からはシャワーをひねる音。

「ちえっ、色気ねえなあ」

自分も風呂に入るか、と、起き上がろうとした瞬間、ドアが勢よく開く。

驚いて起き上がると、タオル一枚だけ巻いて、髪から水を滴らせるあみが飛び込んできた。

「あっちの浴室ね、壁につ剥製が……」

あらら、とルキは苦笑いする。

「風呂、使う？」

コクコクと頷くと着替えを抱き締めたまま浴室に入ってしまった。

ガチャン

「…ちっ」

鍵を閉めたあみは、安心して身体を癒した。

宿が用意してくれた薄いワンピースに着替えて、そっとドアを開く。しかしルキはソファアーの上で寝ていた。

「ルキ…？」

返事はなくて、寝息だけが聞こえてきた。

顔を覗くと、ルキのあどけない寝顔にあみはふふつと笑い、ルキに布団をかけて、ベッドに横になる。

「ルキ、ありがとね…守ってくれて、嬉しかったよ。」

ルキに背中を向けたままそれだけ言うと、あみは深い眠りに落ちていった。

「…」

ルキはそつと立ち上がり、ベッドに座る。

自分とあみに布団をかけると、あみをこちらに向かせてそつと抱き締める。

街は夜中活気に包まれ、笑い声がいつまでも響いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5097c/>

天使伝

2010年11月14日09時23分発行